

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 星野 晶成

論 文 題 目

短期留学プログラム開発・実施の構造に関する研究
-日本の4大学のASEAN留学プログラムを事例として-

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 山田 肖子
委員 名古屋大学 教授 高井 次郎
(教育発達科学研究科)
委員 名古屋大学 准教授 内海 悠二
委員 (外部) 東北大学 教授 米澤 彰純

論文審査の結果の要旨

1. 論文の概要と構成

グローバル化が進展する今日、大学の国際化が進行し、国境を越えて教育の機会を求める留学生の数は年々増加している。米国、イギリス、オーストラリア、ドイツ、フランス等の先進国は、相変わらず多くの留学生を受け入れている一方で、従来とは異なる国々への留学も増加している。例えば、中国は従来、留学生の送り出し国として知られてきたが、近年は、アジア、アフリカ等の途上国から短期、長期の留学生受け入れを急激に増加させている。日本から海外に留学する学生に関しても、欧米での学位取得を目的とした長期留学の増加は減速している一方で、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、ベトナム、カンボジアなどの東南アジアへの留学は2010~2017年期には、10倍程度の増加を見せている。また、こうしたASEAN諸国への留学は、学位取得を目的としない、数週間程度の短期留学がほとんどであることも、従来の留学とは異なる傾向を示している。

ASEAN留学増加の背景として、学生の海外研修を奨励する文部科学省の競争的補助金制度や大学の国際化戦略、学生のキャリア戦略など、様々な要因が考えられるが、地理的な距離が比較的近い国々への短期留学に関しては、事例報告は多いものの、その意思決定や実施に関して、関係者の視点から構造的にとらえた研究はいまだ限られている。そこで本論では、ASEANに学生を派遣している日本の4大学の教職員への詳細なインタビュー調査を基に、派遣プログラムの開発・実施プロセスでの動機や決定要因につき、当事者の意味付け（センスメーカー）に焦点を当てた構成主義的手法を用いて、分析を行った。

本論は、7章で構成されている。第1章では、研究の背景・目的・方法を概説し、第2章では、日本の大学を取り巻く環境として、大学の国際化に関する政策、少子化や産業界からの圧力など、大学が直面する課題、ASEAN諸国と日本の関係などについて概観した。続く3章は、大学の国際化、留学概念、留学動機、大学の国際戦略等に関する先行研究を整理した。4章では、インタビュー調査の対象者（ASEAN留学プログラムに深く関わっている教職員各大学7~8名ずつ、合計28名）の選定基準や概要、分析に用いる手法を説明した。主な分析結果は5章、6章で提示された。まず、第5章では、ASEAN留学プログラムの開発・実施に影響を与える要因・動機に焦点を当て、インタビュー結果をコーディングした結果、1) 大学的要因、2) 人的要因、3) 学生（受益者）の要因、4) 地政学的要因が把握された。また、これらの要因、動機が有機的に作用した結果として、ASEAN留学プログラムを a) 語学学習型、b) 異文化・地域理解型、c) 学術分野型、d) インターンシップ型の4つに分類できることを示した。続く第6章では、5章で特定された要因・動機を、センスメーカーの視点を用いて、教職員がどのように意味付けしているかを分析した。第7章は、これらの分析を総合し、ASEAN留学プログラムの4つの類型は、教職員の主体的意味付けと大学の置かれた状況や関わっている学生や教員の専門分野の特性などの相互作用により、プログラムの特徴として現れることを示した。

なお、本博士論文のテーマに関連した論文は、既に「国際開発フォーラム」「異文化間教育」の2誌に単著で掲載されている。

論文審査の結果の要旨

2. 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- 従来、大学での海外留学プログラムに関する研究は、それを促進するために導入された政策の効果や実施の度合いを知るための仮説検証型の研究や、留学プログラムに参加した学生へのインタビューや質問票に基づく学生の動機や興味に関する分析がほとんどであった。しかし、ASEANへの短期留学を促進する政策や競争的資金制度を政府が導入したとしても、それを実施する大学とその実施担当者は、政策の成果を上げるという建前だけでは動機付けとして不十分で、それぞれの大学の理念や、個人が置かれた立場、経緯に基づいてプログラム実施に意味を見出していると言える。しかし、そうした実施レベルでのアクターの動機や意味付けに着目して留学プログラム作成、実施過程に影響する要因と要因間の関係を分析した先行例はこの分野ではほとんどなかった。そうした中、本学位申請論文は、4大学の短期留学プログラム策定・実施の当事者へのインタビューを元に構成主義的なセンスメイキング論を援用して分析し、当該研究分野において新たな研究視角を提示しており、学術的な貢献として評価できる。
- インタビュー分析から、短期留学プログラムの開発・実施に係る大学、担当者（教員及び事務職員）、国家、学生、プログラム内容や実施の枠組みに関する要因を抽出し、それらの要因の相互関係に基づき短期留学プログラムの4つの類型を導き出している。こうした要因の一覧や類型は、今後、短期留学プログラムに関する意思決定につき、構造的に把握する際に研究者にも実務者にも参照されうる枠組みとなりうる。

ただし、本論文は、以下の点において改善すべき点があることが指摘される。

- サンプル抽出やインタビュー方法からは、当初から構成主義的な論文となることが予見されたが、調査実施時点では、調査者自身がその方法論の考え方を十分に理解していたとは言えない。そのため、「留学生30万人計画」や「大学の世界展開力」といった文部科学省の政策やプログラムの実施状況を確認するような、調査者自身の発想の偏りがデータに反映してしまい、それが分析の段階での制約にもなっている。
- 当初、留学促進政策への関心の強さから、文献調査にも偏りがあり、執筆を進める中で、構成主義的な方法論やより広いコンテキストでの大学の国際化に関する文献を追加したものの、文献レビューに偏りが残っていることは審査委員からも指摘があった。
- 4大学のASEAN短期留学プログラムに特化したケーススタディから、一定の類型を導き出すことはできたものの、これらの事例に固有の要因と一般化できる要因を峻別はできておらず、事例研究を超えた一般化の可能性は検証されないままである。

このように、本論文は、事例研究であるがゆえの一般化の限界や、データ収集段階での未熟さに起因する限界はありつつも、伝統的な欧米先進国の大学での学位取得を目的とした長期留学とは異なるASEANへの短期留学プログラムの特徴を、その形成・実施に携わる大学教員及び職員の視点から解

論文審査の結果の要旨

きほぐした点で独自の貢献が高いと思われる。このことから、本論文は、博士論文として期待されるレベルには十分に到達していると判断される。

3. 結論

以上の評価により、本論文は、博士（国際開発学）の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。